

1 3. あなたがたは、地の塩です。

もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。

もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

1 4. あなたがたは世界の光です。

山の上にある町は隠れることができません。

1 5. また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。

燭台の上に置きます。

そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

1 6. このように、あなたがたの光を人々の前に輝かせ、

人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

説教

イエスさまは山上の説教の冒頭の締めくくりとして、このように教えてくださいました。

イエスさまを信じ、神さまの恵みにより、罪贖われて永遠のいのちをいただいた私たちキリスト者は、神さまなくては生きていけない「心貧しい者」です。罪と滅びの中にある世と自らの現実を「悲しむ者」です。一切の困難な現実をへりくだって受け止める「柔和な者」です。どうしたら神さまに喜ばれるのかをいつも真剣に追求する「義に飢え渴いた者」です。神さまから憐れみを受けて「憐れみ深い者」です。真っ直ぐに神さまを求め続ける「心きよい者」です。罪と滅びの現実から天の御国の「平和を造り出す者」です。そのためにあらゆる迫害に耐えて日々格闘している者です。そして同時に、いつも慰めに満ち、世界を相続し、満ち足り、憐れみを受け、神を見、神の子と呼ばれ、あらゆる迫害や困難を喜んで受け止めて、天の御国を相続する者です。「心の貧しさ」「悲しみ」「柔和さ」「義への飢え渴き」「憐れみ」「心のきよさ」「平和をつくる」「そのための迫害」は私たちキリスト者のシンボルです。キリスト者とは、この世に於いては「心貧しく」、「悲しみ」、「柔和」で、「義への飢え渴き」、「憐れみ」、「心のきよさ」に満ち、あらゆる困難と迫害を耐え忍んでこの世に「平和」を造り出していく者なのです。

それでイエスさまは、救われた私たちが「地の塩」「世の光」と言われます。「塩」は生ものを殺菌し、「光」は闇を照らします。つまり、神さまの恵みによって救われた私たちキリスト者は、罪の世をきよめていく「塩」であり、暗黒を照らす「光」であるということです。

ここで注意すべきことは、イエスさまは私たちの行いが「地の塩」「世の光」と言っておられるのではなく、私たちの存在自体が「地の塩」「世の光」と言っておられるという点です。何をするまでもなく、私たちは、救われたこの自分自身そのものが神さまの憐れみときよさを有力に証しする証拠です。さらに言えば、たとえ何もできなくても、神さまの恵みによって救われたこの存在自体が、神さまの憐れみときよさとを力強く証ししている「地の塩」「世の光」だとイエスさまは言われるのです。それはちょうど、自分からは光らないけれども太陽の光を反映して光り輝く月のようです。私たちキリスト者は太陽のように自ら光ることはできません。でも、太陽の光を反射して光り輝くことができます。つまり、神さまの恵みときよさの光をいっぱいを受けて、それを世界に向けて反射することができるのです。これは必ずしも信仰的にエリートクリスチャンであることにより可能なわけではありません。良くできなければできないなりに、このような弱くて罪深い者を神さまが救ってくださったということで、神さまの憐れみを反映するものとなるでしょうし、良くできたらできたと、神さまのきよさを証しするものとなるでしょう。

そしていずれにせよ、つまり良くできたにせよできないにせよ、私たちが神さまの前に心貧しく、罪を悲しみ、へりくだり、義に飢え渇き、神さまの憐れみを受け、真っ直ぐに神さまを見上げつつ、この罪の世に平和を造るべく奮闘する姿は、まさに罪の世と闘って罪の世をきよめる「地の塩」です。何が罪で何が善であるかを明らかにし、何が神さまに喜ばれ何が神さまに忌み嫌われるかを明らかにする「世の光」です。

そしてイエスさまは、結論として言われます。

16. このように、あなたがたの光を人々の前に輝かせ、

人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

最後の「天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」は次のように訳すことも可能です。「天におられるあなたがたの父の栄光をあらわすようにしなさい」つまり私たちキリスト者が、神さまをほめたたえ、罪を悔い改め、あるいは良きわざに励み、恵みを証しするなどして、神の恵みときよさをあらわすことで、それを見た周りの人々も、私たちキリスト者と同じ様に、神の栄光をあらわして生きるように、ちょうどそのように神の栄光をあらわして生きなさい、とイエスさまは言われるのです。

金善州神学生の献身の証しを聞きました。ニュースで、ある大人が何の理由もなく5歳の子どもに塩酸を浴びせて殺した事件を聞き、神さまの恵みを知らない人々に福音を伝えたいと献身を決意なさったそうです。「死んだ子どももかわいそうでしたが、子どもを殺した大人も哀れでなりませんでした。そして、罪に支配され、罪に縛られているその大人には、神さまの福音が必要だと思うようになりました。この世の知的な教育や道徳的な教育が足りないからそのようなことが起こったのではなく、神さまを畏れる知識がないからそのようなことが起こるのだと思いました。この地上から神さまの栄光が失われたままでいてはならない、神さまに愛されているのに罪の奴隷になって最も哀れなその魂のために福音を伝えたい、という熱い願いが私の心から湧き溢れました。そして、主の働きのために私を用いてくださいと神さまに祈ったのでした。」

この世は神さまを知らない。罪を犯した人も神さまを知らない。けれどもその人も神さまに愛されていて、人を殺すようなことをしたら神さまは怒りを発せられる。人を殺すことを神さまは願っておられるのではなく、互いに愛し合い助け合うことを願っておられる。そのような神さまの愛を知らないから、つまり、神さまは愛に満ちておられるのに、その神さまの栄光がその人にもこの世にもあらわれていないから、だからこのような犯罪が起こってしまうのだというのです。神は愛だけれども、神さまは愛に富んでおられるけれども、神さまは恵みに満ちておられるけれども、それをあらわす人がいなければ、結局は神さまの栄光は天にだけ満ちていて、この地上にはあらわれないのです。

この世は罪の世です。罪人ばかりが住んでいます。神さまを知らなければ、自分が罪人であることもわかりません。何が罪で何が善であるのか、何が神さまに喜ばれ何が神さまに忌み嫌われるのかを知らないままに、多くの人々は生活しています。そして、わけのわからぬまま滅びに向かっているのです。その意味で、世界は巨大な暗闇に覆われています。

このような中で、私たちキリスト者は「世の光」として世に生かされています。そして「世の光」として世に遣わされているのです。イエスさまは、私たちが世に迎合し世に倣って世と共に滅びるのではなく、むしろその反対に、世が私たちを見て私たちのように生きるよう、そのようにしっかり生きて私たちに言われます。つまり、私たちキリスト者というものは、この世に先駆けて新しい生き方を生きるのです。誰もやっていない生き方を生きる、ということになります。偶像を拝まないとか、安息日を聖として生きるとか、父と母を敬うとか、殺さない、姦淫しない、盗まない、嘘をつかない、貪らない。こういう生き方は、この世から見たら画期的というより、革命的な生き方です。最も急進的な、ラディカルな、過激な、前衛的な生き方なのです。

だから、この世から迫害もされます。全国民が偶像を拝んでいる時に、自分だけ偶像を拝まない、神社参拝しない、今なら日の丸を拝まず、君が代を歌わなければ、国家への反逆と見なされるのです。「殺してはならない」と命じられ

ているから、戦争反対で、兵役も拒否するとすれば、やはりこれは過激な国家反逆となります。姦淫然り、嘘つき然り、この世のみなが罪を犯している中であって、自分だけやらないとなれば地が揺るぎます。迫害されたり、嫌がらせされたり、総攻撃を食らうかも知れません。でも、実はそのことによって神のことばがこの世に宣教されていくのです。日曜日に学校行事が行われてみんな参加する中で、それに参加しない者がいたら、安息日を聖とせよとのみことばが証しされます。学校の全員が君が代を歌って現人神天皇を讃美する中で、それを讃美しない人間がいることで、第一の戒めが証しされるのです。これが「神の栄光をあらわす」ということです。「神の栄光をあらわす」とはこういうことです。「神の栄光」とは、簡単に言うと「神さまのすばらしさ」のことです。人格を持っておられる神さまは、その愛と正義が輝きを放ちます。神さまの愛が輝きます。神さまの聖さの故にまばゆいのです。だから、その神さまの栄光は「恵みとまことに満ちた栄光」というものです。ですから、その天上の神の栄光を地上にあらわすということは、それを誰もやっていない中で、自分だけそれをする生き方を覚悟しなければなりません。この世のみなが暗黒のわざを働いている中で、自分だけが天上の光ある神のわざをなすのです。

それは新しい歴史を創造するに等しいことです。罪の世に新しい義の歴史を創造します。悪魔の世界に神の国を造ります。地に平和を造るのです。偶像を拝まない生き方や安息日を守る生き方、殺さない、姦淫しない生き方ばかりでなく、感謝して生きるとか、献金するとか、奉仕するとか、祈るとか、伝道するといったことも、私たちキリスト者がなす一つ一つの働きは、どれもこれも、他の誰かがやっているからやる、或いはやらないから自分もやらないということではなくて、誰もやっていない中で、自分が神さまから教えられて、それをやるということです。一つ一つの私たちの働きは、神の栄光をあらわす、創造的なわざでなければなりません。

私たちは、天にいます父なる神の栄光を、人となって世に来られたキリストを通して見ることができました。同じように、世の人々は、私たちキリスト者を通して神の栄光を見ることができます。恵みとまことに満ちた神さまの栄光を見ることができるのです。ですから、私たちの責任は重大です。神さまの栄光は無限で天に満ちていますが、その神の栄光を見て、それをこの地上にあらわす私たちは、貧しく、悲しみ、飢え渴き、あらゆる迫害と困難を耐え忍びつつ日々格闘しています。そしていい加減にしかやらないと、そういう程度の栄光しかあらわれません。そうになると、それを見て育つ子どもや周りに人は、そのようにしか育たない。弟子はその師にまさらず、です。

例えばこういう人がいます。ある人は伝道熱心でよく伝道しますが、でも、その人が伝道して洗礼を受けた人があまり教会に来ません。どうしてだと思いませんか？その伝道した人自身が教会にあまり来ないからです。洗礼を受けた人から見ればその人は師匠のようですが、その師匠とも言うべきその人が教会に来ないので、その人から教えを受けて洗礼を受けた人も、その師に倣って、安心して教会に来ないのです。つまりこの場合、その伝道した人は、神さまの恵みを証して伝道するという形で神さまの栄光をあらわしましたが、「安息日を聖とする」という戒めを守って日曜日に忠実に礼拝しに教会へ行くという栄光はあらわさなかったこととなります。ある人は年に一度クリスマスにしか教会に行きません。だから、その子どもも、親に倣って、年に一度、クリスマスにしか教会に行きません。ある人は洗礼を受けたクリスチャンであるのに、仏壇や神棚に手を合わせて偶像崇拜の罪を犯します。それで、それを見て育った子どもたちも、「ああ、クリスチャンでも仏壇拜んでいいんだ」と親に倣って同じ様に罪を犯します。教会で親が熱心に奉仕する姿を見て育ったその子どもは、自分も成長して大人になったら教会で奉仕するし、教会で親がいい加減にしか奉仕しない姿を見て育ったその子どもは、自分も親に倣っていつまでも奉仕しません。親が聖書読まなきゃ子どもも聖書読まないし、親が献金しなければ子どもも献金しません。弟子はその師にまさらず、なのです。

だから、イエスさまは言われます。

このように、あなたがたの光を人々の前に輝かせ、

人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父の栄光をあらわすようにしなさい。

私たちがその先駆けにならなければなりません。みながその後を追っかけてくるように、私たちが神の栄光をまず先

駆けてあらわさなければなりません。どこまで自分の生活を改革できるかわかりませんが、より一層改革しなければなりません。闘わなければなりません。格闘しなければなりません。心貧しく、天を仰いで、みこころを求め、そこで見た神の栄光をあらわすのです。あらゆる困難を耐え忍んで、平和をつくらねばなりません。これは戦いです。

キリストは、十字架で死んで、恵みとまことに満ちた父なる神の栄光をあらわされました。そのように、罪贖われた私たちは、罪と格闘しながら、ひとつひとつ神の栄光をあらわして生きていきたいと願います。

ここに集われた兄弟姉妹が、罪と格闘しながら神の栄光を世にあらわし、みなさんを通してあらわされた神の栄光を見て、世の人々もみなさんのように神の栄光をあらわすものとなるよう祈ります。